

私の研究



アロマザリングと共生社会

中山 哲志 (なかやま さとし)

東日本国際大学 健康福祉学部
学部長



I はじめに

少子高齢化、生活困窮問題、子育て支援など、現代社会は社会福祉にかかわるさまざまな課題を抱えています。身近な地域生活において、誰一人としてのけ者にせず共に生きる社会を実現するためには、何よりも一人ひとりのウェルビーイング（well-being 健康で安心できる「幸福」「福祉」を意味する）が実現されなければなりません。

今回「私の研究」で紹介する里親の方々が果たす役割は、社会的養護を必要とする子どもたちのウェルビーイングを育むものです。子育てにおいて、血縁によらない社会的な支援を提供する里親たちの養育は、アロマザリング（母親以外の個体による世話を意味する）であり、共生社会の実現を支えるものにほかなりません。

里親制度とは何か。また、里親（ここでは養育里親）によって支えられる社会的養護の現状と課題について、調査研究^{1) 2)}により得られた知見を交え考えていきたいと思えます。

II すべての子どもに健やかな養育環境を

1 里親制度の変遷

里親制度は、昭和23年に施行された児童福祉法

によりはじめて法定化されました。平成12年の改正により里親の種類も増え、平成16年の児童福祉法の改正では、「家庭的」な養育環境の重要性がより強調され、子どもが特定の大人との愛着関係のもとで養育され、自己肯定感や適切な人間関係を獲得していくことが発達的にも重要であると考えられるようになりました。

2 家庭的養育環境による児童虐待の防止

さらに、改正児童福祉法（平成28年）では、子どもの権利主体が明確に位置付けられ、すべての児童が心身ともに健やかに養育されるよう、より家庭に近い環境での養育を推進することが明記されました。

こうした動向の背景には、児童虐待の深刻な現実があります。児童虐待を予防し、発生に対しては迅速かつ的確に対応するためにも「家庭的養育」がいっそう重視されるようになりました。

3 里親委託率を増やすための数値目標の設定

改正児童福祉法の翌年に出された「新しい社会的養育ビジョン」（新たな社会的養育の在り方に関する検討会）には、里親数を増やすこと、里親

養育の質を高めるための機関を設けることが提起されています。保護者と分離し、児童養護施設、乳児院、里親、ファミリーホームで養育する代替教育のうち、約9割が施設で養護されている現実に対して、里親家庭で生まれる子どもの比率を大幅に増やす数値目標を掲げました。たとえば、3歳未満においては、概ね5年以内に75%までに委託率をあげる目標設定ですが、達成は決して簡単なものではありません。

Ⅲ 養育困難と自立支援

1 里親たちが経験する育てづらさ

全国で約四千人の子どもたちが養育里親のもとで暮らしています（表1）。家庭的な環境のもとで里親たちは養育に努めていますが、里親子関係がうまく築けない場合も少なくありません。

里親会の協力のもとに実施した2つの調査から、養育実態と里親の意識に関する知見を得ることができました。ここでは、里親子関係の実際を表す養育困難と自立支援に向けた里親の思いや考えに焦点をあて述べることにします。

2 不遇な生育環境と情緒的絆

(1) 養育困難を感じる里親は約6割

里親は養育の実際をどのように捉えているのでしょうか。「里子は育てやすい子ですか」の質問に、全体の約6割が養育困難を感じ、しかも「特に難しい」と感じる割合が約25%もありました。

(2) 人とのつながりが弱く人間関係が不器用

里親が養育返上を考える場合がありますが、これは委託された子どもが持つ養育のしづらさに関係しています（表2）。「人とつながる力」「人の

気持ちを理解する力」「場の空気を読む力」が弱く、「人間関係が不器用である」印象を与えています。自由記述には「好き嫌が多く、新しい人や場所に対する不安が大きい」「（里親の）思いや言葉がうまく伝わらない」「人が嫌がることを平気で言ったりするので誤解を受けやすい」等の記述が目立ちました。

なぜそのようになるのでしょうか。里親家庭に委託されるまでの状況に関する記述から、いくつかの深刻な背景が絡み合っていることが推測されました。ひとつは虐待経験です。「親から虐待を受けたように感じますか」の質問には、65.8%が「あった」と回答しました。また、親の死亡、貧困など相当に辛い不遇な経験も記述されています。さらに、発達障害（医師等から「あり」と診断された割合34.1%）など、他の障害も含めて障害があることも考えられ、専門知識の不足や専門的な支援体制が十分に整っていないことも関係していたのではないかと考えられます。

(3) 危機的な養育環境と情緒的絆の形成

「数日間放置された状況で保護された」「幼少期に凄まじいネグレクトを受けた」などの記述から、里子たちの多くが、愛着関係にかかわる情緒的絆の形成が難しい環境で暮らしていたことが考えられます。恐れや不安を感じるネガティブな情動を伴う危機的な状況下で、特定の対象との関わりを求めても叶わず、安心安全な感覚を持ってない経験をしていたことが推測されます。

愛着関係の形成の影響は、乳幼児期だけに限らず、成人期における人間関係、恋愛、配偶関係など生涯にわたるものと言われています。

子どもの生活における他者との情動的なやりと

表1 社会的養護（里親、施設）の対象児童数（人）

家庭的養育	里親*	5,424	養育里親 4,134
	ファミリーホーム	1,434	
施設養育	乳児院	2,706	
	児童養護施設	25,282	
	その他	9,058	
計		43,904	

平成31年4月 厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課資料より作成
*養育里親のほか専門里親、養子縁組里親、親族里親を含む

表2 気持ちを通い合う×養育返上を考えたか（%）

	どうしても通じない	通じないこともある	(小計)	わりと通じる	気が合う
考えたことがある	8.2	45.1	53.3	39.4	10.3
ほとんどない	2.0	24.0	26.0	60.4	13.6
全くない	0.8	11.1	11.9	47.1	41.0

りの質が、その後の愛着関係の形成や自己肯定感、アイデンティティに影響を与えることを考えれば、里親の温かな家庭的環境のなかで育まれることが大変重要なものであることがわかります。

3 自立支援を育む養育環境とレジリエンス

相当につらい生活を経験してきた里子に対して将来の自立に向けて、困難に負けない逞しさとしてのレジリエンス (Resilience) を育むことに里親たちは関心をもっています。養育環境との関連でどのように捉えているのでしょうか。

(1) 里親からみた養育環境

「家族 (里親) は、私のことを気にかけてくれます (87.9%)」「担任の先生は、私のことを気にかけていてくれます (69.4%)」の結果が示すように、里親は、里子にとっての養育環境が肯定的なものであると受けとめていました。しかし一方では、友達との比較や心配、健康面について里子の自己評価が低いことから、里親は全般的にわが家の養育環境に対して肯定的に捉えながら、心理的に不安定な面を抱えながら育てていると捉えていることがわかりました。

(2) 里子の育ちとレジリエンス

① 養育期間とレジリエンス

長期間にわたる養育で、レジリエンスの高い子どもになって行くとは里親はみていません。しかし、養育の継続が里子のなかに良い変化をもたらすとの評価もしています。たとえば、「人に心を閉ざす」「パニックを起こす」「人の顔色を見る」「すぐに泣く」などの行動上の偏りや問題に改善傾向があったと考えています。また、自己中心性の面はあるが、「人への信頼」や「安心感」を持

つことについても着実に改善してきたと捉えていました。

② 行動の偏りとレジリエンス

「行動がマイペース」「気が散りやすい」「不注意なミスをする」「じっとしているのが苦手」「落ち着きがない」「一方的にしゃべる」「情緒が不安定」の7項目から構成した行動面の偏りとレジリエンスの得点関係を検討した結果、全体的に行動面の偏りが少ないほどレジリエンス得点が高いことがわかりました。

③ 気持の通い合いとレジリエンス

「気持がとても通う」里子ほど、レジリエンス得点が高い傾向があり、レジリエンス得点が高い里子には情緒面で不安定な傾向が認められました。

IV まとめ

児童福祉法の改正を経て、里親制度の充実など社会的養護の改善は制度として図られてきました。しかし、現状ではさまざまな困難を抱えた子ども達に、日々懸命に寄り添う里親の養育困難と苦しみが想像されます。福祉心理学的な視点から里親子関係のあり方を研究することで、より良い支援につなげ、里子、里親一人ひとりのウェルビーイングの実現を目指していければと考えます。

- 1) 中山哲志、他 (2017) 「発達障害児を抱える里親の養育困難に関する実証的研究」平成26年度～28年度 文部科学省科学研究費助成事業基盤研究 (c)
- 2) 中山哲志、他「里親家庭を巣立つ若者の自立支援に関する実証的研究」平成30年度～令和2年度 文部科学省科学研究費助成事業基盤研究 (c) (継続中)

<プロフィール>

1952年東京都生まれ。東京教育大学教育学部卒業、筑波大学教育研究科修了 (リハビリテーション)。言語聴覚士、ガイダンスカウンセラー、福祉心理士。聾学校や海外での日本語指導を経て、大学教育に携わる。2019年より同大学教授、現在に至る。

【主な著書】中山哲志・深谷昌志・深谷和子 編「子どもの成長とアロマザリング・里親里子問題への接近」ナカニシヤ出版、2018；中山哲志・稲谷ふみ枝・深谷昌志「福祉心理学の世界へ一人の成長を辿って」ナカニシヤ出版、2018